

建設困難な海域もOK…移動可能な船の上の灯台

スカーウェザー灯台船 (フランス)

船上に鉄の檣やぐらが組まれている。この塔は、そう。灯台である。船の上の灯台。「灯船」や「灯台船」、英語では「Lightvessel」と呼ばれ、灯台を建設することが困難な海域ひょうはくでも錨泊いかりどまりができるほか、形状が変化する砂州すなづちに対して移動して運用可能という利点があった。

考案したのはイギリスの貧しい床屋と記録されている。彼のアイデアに投資家が賛同し、1732年にテムズ川河口の砂州を知らせるために設置された。その後アメリカ、ドイツ、ロシア、北欧の国々などで運用され、日本でも明治2(1869)年に本牧灯船が点灯。現在の「横浜シンボルタワー」の沖合で入港を

助けた。船体は灯台船を示す赤。船乗りと灯台守が乗船し、夜は赤い光を放つ。また見張りや入出港する船舶の記録、気象観測、霧鐘の業務を務めた。同じ形状の灯台船は函館にも設置されたほか、昭和に入ると東京湾の入り口を示す東京灯船が築造され、昭和43(1968)年まで運用された。

海外では現役の灯台船も残っているが、多くはブイに替わった。老朽化した船を新しくするよりも経済的だからだ。写真の灯台船「スカーウェザー」は長さ41㍍、幅7.5㍍。1947年にイギリスで造船され、最後の錨泊地であるウェールズのスウォンジー湾で1989年まで運用された。現在はフランスのデュアルヌネにある「Port musée (港博物館)」で野外展



示されている。

いつか点灯する灯台船の姿を眺めてみたい。ドーバーやイギリス海峡などに浮

かんでいるようだが…さて、どうやって近づこうか。

(つづく)